

第4号

研究紀要

平成 30 年度

愛媛県立宇和特別支援学校

巻 頭 言

校長 向 井 誠 二

今年は2年に1度の「研究紀要」発刊の年です。時宜にあった研究を、日々多忙を極める中でまとめていただいた先生方にお礼を申し上げます。様々な教育問題が渦巻くうねりの中で、我々教員は、特別支援教育の行方をしっかりと見据え、専門性を高める努力をしながら教育実践に取り組んでいかなければなりません。日々の授業の中で、「教えるプロ」としての力量が試されているわけですが、子供たちの将来をより良いものにするという目標の下、「学びあう集団」としての結束を固めることで、明るい展望が開けてくるものと確信しております。

さて、次期の幼稚園、特別支援学校（幼稚部）教育要領、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校（小学部・中学部）学習指導要領が公示されました。特別支援学校（高等部）については間もなく公示の予定であります。そして、周知期間、先行実施期間を経て、幼稚園（幼稚部）については今年度から、小学校（小学部）については平成32年度から、中学校（中学部）については平成33年度から全面実施され、高等学校（高等部）では34年度から年次進行での実施となります。

今回の改訂では、子供たちの現状や課題を踏まえつつ、一人一人の学びを後押しできるように、過去の改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しにとどまらず、「どのように学ぶのか」、そして「何ができるようになるのか」を構造的に見据えての公示となりました。そして、知識の理解の質を高め、資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の視点や、「カリキュラム・マネジメント」の確立、「社会に開かれた教育課程」の実現が求められていることが核となっています。また、身に付けるべき資質・能力を、①「知識・技能」、②「思考力・判断力・表現力等」、③「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱として再整理されるとともに、「カリキュラム・マネジメント」の視点を、「実態把握」、「教科横断的視点」、「PDCAサイクルの確立」、「地域資源等の活用」などをキーワードとして整理されています。

本校においても、教育活動の中でこれまでも継続的に取り組んでいることもありますが、新たな視点を模索しながら一層の充実を図る取組をしていくことが不可欠であります。特に地域資源の活用については、地元南予の自然環境や施設等との関わり、地域人材の活用、地域交流などを充実させながら、地域に根付いた学校づくりを推進し、将来地域で活躍できる人材の育成に努めていくことが必要であります。また、PDCAサイクルを活用した評価・改善については、長期的、短期的スパンの中で、しっかりとしたシステムを確立していきながら、本研究のような取組を通して、個々の評価を適切に行い、より良い授業実践に取り組んでいきたいと考えます。

最後になりますが、本研究活動に御指導・御助力を賜りました皆様に感謝申し上げますとともに、この研究紀要を御高覧いただきました関係の皆様には、今後の本校教育のため、忌憚のない御教示を賜りますことをお願い申し上げます。

目 次

巻頭言

校長 向井 誠二

聴覚障がい部門の取組

幼稚部・小学部の取組	1
中学部・高等部の取組	9

肢体不自由部門の取組

肢体不自由部門の研究の概要	17
第1グループの取組	21
第2グループの取組	23
第3グループの取組	28
第4グループの取組	30

知的障がい部門の取組

研究の概要	34
小学部	36
中学部	46
高等部	56
訪問教育部	67

知的障がい部門

(第 19 号)

研究の概要

1 研究に当たって

(1) 研究に至る経緯

本校では、キャリア教育の充実を目指し、児童生徒の将来を見据えた教育の実践をテーマに継続して授業改善に取り組んできた。平成29年度、30年度は特に教員の授業力向上と教材・教具の開発に焦点を当て、授業研究を行った。

平成29年度には、全教員が指導案を書き、授業評価シートを活用して、日々の授業を見直すことができた。平成30年度は、各部ごとに授業改善の目標を設定して、焦点となる研究授業を行って、授業研究を進めた。2年間の取組ではあるが、授業に対する教員の意識を少しでも高め、様々な実態の子供たちに対する配慮がなされた授業作りを考える機会となった。

(2) テーマ

「児童生徒の将来を見据えた教育の実践」
～意識・主体性・意欲を育てる教育～

(3) 設定の理由

本校では、継続してキャリア教育を推進し実践してきた。高等部では、平成26年度から始まった「愛顔のえひめ特別支援学校技能検定」の受検に向けた取組が定着し、キャリアトレーニングの時間の授業内容や実際的な練習方法の工夫など産業科を中心に授業研究を行った。普通科では学年ごとに生活単元学習の中で清掃活動に絞って授業研究を行った。中学部では、生活意欲の向上・主体的行動の質を高める授業実践を目指し、国語、数学、体育の教科指導を取り上げ、授業研究を行った。小学部では、子供たちが主体的に活動する授業、ICTを活用した教材教具を取り入れた授業実践を目指し、授業研究を行った。これらの授業研究の積み重ねは、日々の授業を見直し、系統性のある授業内容の構築と様々な児童生徒の実態に即した授業の実践や教材の研究につながり、本テーマである児童生徒の将来を見据えた教育を実践することにつながるができると考え、このテーマを設定した。

(4) 研究の目的

部別研修において、小学部・中学部・高等部・訪問教育ごとに、それぞれの学部の実情に合わせた研究授業を通して授業研究を行い、教員の授業力向上につなげる。

(5) 研究の方法

月1回部別研修の時間を設け、継続した研修時間を確保して研究授業を行い、授業研究会を行う。授業者による指導案の共有、評価シートを活用した授業研究、データの保存と蓄積を行う。研究授業の実施日と部別研修の日程が異なる場合もある。

実施予定日とその内容

期 日		名 称
5	29 (火)	部別研修① (研究の計画)
6	19 (火)	部別研修② (研究授業・授業研究会の実施)
8	23 (木)	部別研修③ (研究授業・授業研究会の実施)
9	25 (火)	部別研修④ (研究授業・授業研究会の実施)
10	30 (火)	部別研修⑤ (研究授業・授業研究会の実施)
11	27 (火)	部別研修⑥ (研究授業・授業研究会の実施)
1	29 (火)	部別研修⑦ (研究のまとめ)
2	19 (火)	部別研修⑧ (研究の報告)

小学部 子供が主体的に活動するための授業作り
～ICTを活用した授業実践を通して～

1 はじめに

今年度、小学部では、昨年度に引き続き「子供が主体的に活動するための授業作り」をテーマとして、授業実践を行った。昨年度は、一人一授業と、合同で行う授業学年グループ一つずつにおいて、研究授業を行った。合同で行う授業の研究授業を行う目的として普段合同で授業を行っていても、活動内容やTTとしての動き（支援の仕方など）について話し合う時間を取れないため、チームの教員に任せている部分が多い。また、授業後も改善点や気になったことなどについて、時間を取ってゆっくり話し合う時間をなかなか取ることができないなどの状況があった。これらの現状から、指導案を練り合うことで、授業の質を高めることを目的に研究を進めた。指導案を授業者全員でよく練り合って完成し、その指導案を基に授業をすることで、より成果を感じる授業を行うことができた。指導案を練り合って完成させる過程で、何度も話し合いを重ねた結果、教師の動きが明確になった。教師の動きが明確になったことで、教師それぞれの子供への関わり方が分かりやすくなり、授業もスムーズに成り立っていた。授業者が指導案を十分に練り合うことで、子供への支援が明確になり、よりよい授業を実践することができると考えられる。チームで授業を作っていくに当たり、授業者全員が意見を交わし、何度も検討して見直すことで授業者の授業に対する意識も高まっていた。授業者の意識や準備が、よりよい子供の支援につながり、その結果子供が主体的に活動する授業となる。課題としては、段取りが綿密に行われすぎると、子供の意欲を欠く場面もあるので、バランスをとることが大切である。授業案をよく練り合う時間がなかなか取れないのが現状であるが、TTの動きや子どもへの支援の仕方などについて話し合い、チームで授業を作っていくことを常に意識してよりよい授業を実践する努力をしていかなければならない。

今年度も、学校全体の研究テーマとしては、「児童生徒の将来を見据えたキャリア教育の実践」である。小学部のテーマは、昨年度と同様「子供が主体的に活動するための授業作り」である。サブタイトルとして、「ICTを活用した授業実践を通して」とした。

教育におけるICT（情報通信技術）の活用は、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業を実現する上で効果的であり、主体的・対話的で深い学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の実現に寄与するものである。障がいのある児童の中には、障がいの状態や認知の特性等に応じてICTを活用することにより、苦手なことを補い理解を促すなど、効果的に学習を進めることができる場合がある。また、ICT機器を適切に活用することにより、作業を伴う活動やコミュニケーションが困難な児童が、これらの困難を改善・軽減できる場合もある。そのため、障がいのある児童にとっては、障がいのない児童に対する一般的なICT活用に加え、障がいの状態に応じてICTを活用できるよう工夫することも大切である。「特別支援学校学習指導要領解説総則編」には、「特別支援学校においては、児童生徒の学習を効果的に進めるため、児童生徒の状態等に応じてコンピュータ等の教材・教具を創意工夫するとともに、それらを活用しやすい学習環境を整えることも大切である。」と記述されている。

そこで、本校小学部では、ICTを活用した授業実践を一つの柱として、それぞれ研究し、部全体で情報を共有したり、交換したりすることで、よりよい授業作りをしていくことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

2 目的

- 教員がICTの活用方法を身に付け、個人のスキルアップを図る。
- ICTを活用することにより、児童の実態に応じた授業を行い、児童が主体的に行動する態度を身に付けるような授業を実践する。

3 方法

- (1) ICTを活用した授業を各学級一つずつ行う。
- (2) できるだけ他の人の授業を参観する。
- (3) 全員が授業を参観することは難しいので、授業を行った教員が授業でICTをどのように活用したのか説明する場を設定し、小学部全体で情報を共有する。
- (4) ICT機器やネット環境、アプリケーション等に関する専門的な知識・技能を有する教員から学び、スキルアップを図る。

4 実践内容

- 授業の学習指導案と併せて、「ICT活用法報告書」を作成し、使用する機器・ソフト・アプリなど、活用場面、ねらい、子供の活動とICTの活用方法、活動場面でのねらい、反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）、今後の課題を各授業者が記録する。

ICT活用法報告書

単元（題材）	ポテトチップスをつくろう
使用する機器・ソフト・アプリなど	iPad（iMovie）、HDMIケーブル、テレビ
活用場面	おやつ作り
ねらい	手順を確認して、主体的に活動する。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
・活動の流れを知る。	○事前に調理の様子を動画撮影し、iMovieで編集しておく。 ○iPadをテレビに接続する。 ○編集した動画をテレビに映す。 ・動画を見て、活動の流れや調理の手順を確認する。
・手順に従って、調理していく。	○活動の段階ごとに動画をテレビに映す。 ・動画を見て確認しながら手洗いを丁寧にする。 ・調理手順を動画で確認して、順番に調理する。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
<p>活動を始める前にあらかじめ作成した動画を見るなどして活動の流れを確認しておくことで、スムーズに活動に入ることができた。</p> <p>本クラスの児童は手洗いが不十分な部分があり、また食品を取り扱うことから動画の初めに手洗いの指導を長めに取り入れた。活動を始める前には、その映像を何度も見ながら丁寧に手洗いをすることができ、衛生面に十分に注意することができた。</p> <p>調理活動では、動画上で示された動きを模倣するなどして自発的に活動する様子が見られた。</p>	
今後の課題	
他の児童が活動している間、待っている児童は手持ちぶさたな状態であった。タブレット本体の機能やアプリを活用して待ち時間を有効活用していきたい。	

単元（題材）	ポップコーンをつくろう
使用する機器・ソフト・アプリなど	iPad、タブレットスタンド、HDMIケーブル、テレビ
活用場面	おやつ作り
ねらい	他の児童の調理の様子を観察して参考にする。 食材の変化の様子を見て楽しむ。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
・他の児童が調理をしている間、その様子を映像で観察する。	○iPadをテレビに接続し、タブレットスタンドにiPadを取り付けて、タブレットスタンドを作業台に固定する。 ○カメラアプリを起動し、撮影待機状態にする。 ○作業台上の調理器具に焦点を当て、テレビに映す。 ・調理をしている児童の手元の様子を映像で確認し、自分の番の時に生かせるようにする。
・コーンがはじける様子を映像で観察する。	○ポップコーンメーカーに焦点を当てる。 ・コーンがはじけてポップコーンになっていく過程を見て楽しむ。

反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）
<p>児童が順番に調理をする活動を行う際に、書画カメラの要領でタブレット端末とタブレットスタンドを使用し、テレビに映っている他の児童の活動の様子を見ることで待ち時間を有効活用することができた。自分の番がきたら、他の人が行っていた様子を参考にして模倣しようとする姿も見られた。</p> <p>ポップコーンが出来上がる過程を観察する活動では、テレビ画面を通して観察することで、コーンがはじける様子や体積が急激に増えていく様子を興味を持って安全に観察することができた。</p>
今後の課題
iPadが自動ロックしてしまったことで映像が突然消えてしまい、児童の集中が途切れてしまう場面があった。事前に常時点灯の設定にしておくなどして、児童の集中を切らさないように注意したい。

単元（題材）	おすもう集会をしよう
使用する機器・ソフト・アプリなど	パソコンのパワーポイント（教材作り、指導時） フリー効果音サイト「効果音ラボ」（教材作り） ボイスレコーダー（教材作り）
活用場面	行事の事後指導
ねらい	活動の内容や様子を思い出す。発表をするときの手掛かりにする。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> おすもう集会の内容を振り返る。 取組のビデオを見る。 楽しかったことや頑張ったことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○パワーポイントで、行事の内容を示す。 ○効果音サイト「効果音ラボ」でダウンロードした効果音や、ボイスレコーダーで録音した声をスライドに貼り付ける。 ・子どもたちの注意をひくために、アニメーションや効果音（拍子木、太鼓、呼出など）を使用して提示する。 ○パワーポイントの中に、動画を入れる。 ・パワーポイントに動画を貼り付けることで、自分や友達の見組を見る。 ○パワーポイントの中に、写真を入れる。 ・写真を見て思い出したり、指差しで自分の気持ちを伝える手段にした
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
<p>アニメーションや効果音を用いることで、興味を持ってスライドを見ていた。取組の動画を入れることで、当日の様子を思い出しやすいかたり、模倣したりして楽しむことができた。</p> <p>写真を入れることで、発表をするときの手掛かりになったり、指差しで好きなことを伝えたりすることができた。</p> <p>HDMIケーブルで接続したが、音声パソコンから出ているのが残念だった。</p>	
今後の課題	
動画をみる時間が長く、飽きてしまう児童がいた。活動場面を増やすなどする必要がある。	

単元（題材）	クリスマスを楽しもう
使用する機器・ソフト・アプリなど	タブレット端末

活用場面	絵本の読み聞かせ・アプリでマッチング・ サンタからのビデオレター
ねらい	児童全員が絵本を見やすい環境を整える。 マッチングの操作をやすくする。 児童のわくわく感を引き出す。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> 絵本「サンタのかくれんぼ」の読み聞かせを聞く。 何が隠れているかを答える。 タブレットを操作し、イラストのマッチングをする。 サンタさんからのビデオレターを見て、ダンスの練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○タブレットをテレビに接続し、絵本を大きく見せる。 ・テレビの画面に映して、子どもたちの注目を集める。 ○児童が見返したいページを選んで映す。 ・「ソリ」や「リース」など答えられなかったページに戻って、単語を確認する。 ○アプリ「X'masパズル」を用いて、クリスマスに関連するイラストのマッチングをする。 ・鉛筆を使用することが困難な児童も、指一本で操作するタブレットを使用することでマッチングをやすくする。 ・タブレットを接続してテレビに映すことで、タブレットを操作している児童も待っている児童も双方が楽しめるようにする。 ○昨年度のDVD映像を編集したビデオレターを流す。 ・サンタさんからのビデオレターであることを伝え、クリスマス集会に向けて、期待感を高める。 ・動きのある映像を流し、注目しやすくする。 ・反転したダンス映像を見て、模倣しやすくする。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
絵本が小さいため、実際に絵本を見せながら読み聞かせをすると注目を集めることは難しい。テレビに映したことで、5人の児童全員が見やすいように提示できた。しかし、仕掛け絵本の良さを出すことができなかった。タブレットスタンドを使って、実際にめくっていくところを提示する方法でも良かった。また、コネクターのコードが短いため、児童がタブレットを使用する際に、一々席を移動して前に出なければならず時間が掛かった。	
今後の課題	
たくさんアプリがあるが、その中から授業に使用しやすいアプリを選択しなければならない。いろいろなアプリの情報を収集して取捨選択していきたい。	

単元（題材）	クリスマスを楽しもう
使用する機器・ソフト・アプリなど	DVD、パソコンのパワーポイント
活用場面	行事の事前指導とクリスマスに関する映像や音楽の視聴
ねらい	児童の興味関心を持ちやすくするために、映像や音楽を使用する
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> クリスマスについて知る。 ダンスをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供用クリスマスDVDを視聴する。 ・児童が興味関心を持ちやすいよう、動画や聴き慣れたクリスマスソングを内容にしたDVDを視聴する。 ○DVDを見本にしてダンスをする。 ・児童が分かりやすいように、ゆっくり動き、繰り返し練習できるように編集しておく。

<ul style="list-style-type: none"> ・クリスマス集会について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○パワーポイントを使用して、昨年度のクリスマス集会の写真を見る。 ・昨年度の集会の様子を写真で流すことにより、活動内容を思い出せるようにする。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
DVDやパワーポイントなどの視聴覚教材を使用し、児童が興味関心を持って集中して見ることができた。意欲的にダンスに参加したり、映像に対して声を出して喜んだりする様子が見られた。	
今後の課題	
パワーポイントは、写真を流すだけでは途中で飽きて見なくなっていたので、アニメーションや音楽を入れて、工夫するべきであった。写真等に興味を持って見ていたので、日頃から活動の振り返りとして、活動時の写真を有効に活用できればと思う。	

単元（題材）	おさかな館へ行こう
使用する機器・ソフト・アプリなど	パソコンのパワーポイント
活用場面	遠足の事前指導
ねらい	活動の内容や流れを分かりやすく伝える。 児童のわくわく感を引き出す。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・いつ・どこに・誰と・何で行くのか、行事の内容を知る。 ・昨年写真を見る。 ・おさかな館クイズをする。 ・一番楽しみなものは何か発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○パワーポイントで、行事の日時や内容を示す。 ・子どもたちの注意をひくために、アニメーションを使用して提示する。 ○昨年写真を貼り付け、一枚ずつ提示する。 ・一枚ずつアニメーションを使用して提示することで、期待感を高める。 ・自分たちが映っている写真を見ることで、活動を思い出すきっかけにする。 ○おさかな館の生き物の写真をアニメーションを工夫して提示する。 ・児童がわくわくし、飽きることなくクイズに参加できるように、写真を回転させたり、点滅させたりいろいろな方法で提示する。 ・クイズに対して、子どもたちが答えるとき、子どもが指さした方に「○」が「ピンポン」という音と一緒に出るようにする。 ○複数枚の写真を一つのスライドに貼り付け、その中から楽しみなものや活動を選ぶ。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
一度、小学部児童全体に向けて同様のスライドを使用したため、クラスの児童は見通しを持って学習に参加した。また、そのときと比べ、集団が小さくなったこともあり、大変集中してスライドに注目していた。クイズは、全体で使用したときよりも問題を増やしたので、飽きることなく考えながら楽しく答えることができていた。	
今後の課題	
パワーポイントで教材を作ることが主であり、自分自身があまりICTを十分に活用できていないと感じている。タブレット端末を上手に活用する方法をどんどん学んでいきたい。	

単元（題材）	交通安全教室（歩行、自転車の乗り方）
使用する機器・ソフト・アプリなど	動画再生アプリ「Quick Time Player」（教材作り） フリー効果音サイト「効果音ラボ」（教材作り） プレゼンテーションアプリ「Keynote」（教材作り、指導時） プロジェクター アナログ用オーディオコード&イヤホンジャック（配線テクニック）
活用場面	交通のルールの確認とクイズの出題
ねらい	児童生徒が交通ルールを覚え、生活に生かす。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・「道路の歩き方」「自転車のルール」の二つの映像を見てルールを知る。 ・クイズをする。 ・交通ルールを説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒に合わせた映像教材を作成する。 動画再生アプリ「Quick Time Player」でインターネット上で警視庁が公開している動画を録画し、ビデオファイルを作る。 ・児童生徒が興味を持って視聴する動画を作成し、学習効果を高める。 ○ルールの説明やクイズの出題にプレゼンテーションアプリ「Keynote」を使用する。 ・児童生徒が理解しやすいように動きを（アニメーション）をつける。 ○効果音サイト「効果音ラボ」で必要な効果音をダウンロードし、スライドに張り付ける。車の急ブレーキで注目させたり、「ピンポン」の正解音をつける。 ○体育館全体にパソコンからの音が届くように、体育館のスピーカーとパソコン端末のアナログ音声端子をつなぐ。体育館の放送機器のところに束になっている先端が赤白のアナログ端子が付いたものを、パソコンのイヤホンジャックにつなぐ。 ・効果音を使用し、注目場面を作ったり、正解を分かりやすくし、喜びを感じやすくしたりする。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	<p>多くの機器を接続して使用するため、一つの機器の調子が悪くなると使用できなくなってしまう。今回は、説明用に作ってスライドの要領が大きく、パソコン上で立ち上がらないことがあった。事前の確認と、容量が大きいファイルを問題なく使用できる環境作りが必要である。</p> <p>クイズへの回答、交通安全ポスターのフレーズを読むといった児童生徒自らが行動し、成果が周りのみんなに伝わると、その児童生徒が喜んでいて、どうやって児童生徒の学習の成果をみんなに伝えられる場や方法を考える必要がある。</p> <p>著作権の問題があり、動画や画像の使用規則が分かりにくい。（分からない）教育に使用する場合は、著作権のハードルはだいぶ下がるが、どこまでがよいのかは曖昧である。</p>
今後の課題	<p>全校児童生徒への説明となると実態が様々である。何を伝えたいかということを明確にし、説明する必要がある。</p>

単元（題材）	クリスマス集会をしよう
使用する機器・ソフト・アプリなど	アイパッドのパワーポイント
活用場面	クリスマス集会の事前指導
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○去年のビデオや写真を見て、クリスマス集会を思い出す。 ○日程や活動内容を知り、クリスマス集会を楽しみにする。

学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度のクリスマス集会のビデオや写真を見る。 ・サンタさんからのビデオレターを見る。 ・クリスマス集会の日程や活動を確認する。 ・楽しい活動を前で発表する。 ・ダンスの練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○去年のクリスマス集会の動画を提示する。 ・スライドに注目できるように、クリスマス音楽をつけた動画を提示する。 ○アプリで作ったサンタからのビデオレターを提示する。 ・ビデオレターを見て、サンタさんクリスマス集会の日程や場所、活動内容を知る。 ○カレンダーを提示して、クリスマス集会の日程と活動内容を確認する。 ・イラストや写真を使用して、クリスマス集会が近づいていることを知って、期待感を高める。 ○複数枚の写真の一つのスライドに貼り付け、その中から楽しい活動を選択して発表する。 ・複数の写真を均等に置くことで、指差しや身振り、言葉で伝えられるようにする。 ○アプリで作ったダンスのビデオを提示する。 ・ビデオを見ながら、楽しくダンスができるようにする。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
<p>アプリで作成したビデオやサンタさんからのビデオレターは、どの児童もよく注目していた。楽しい活動を発表する場面では、複数枚の写真の間を空けて均等に貼ることで、発語のない児童も指差しをして発表していた。実態にバラつきがあったため、発問をする児童をあらかじめ決めておく必要があったと感じた。</p>	
今後の課題	
<p>ビデオレターや写真を提示することはどの児童も興味や関心があることが分かったが、もっと児童の活動量を増やせるような使用法を考える必要があると思った。</p>	

単元（題材）	宿泊学習へ行こう
使用する機器・ソフト・アプリなど	写真アルバムアプリ パソコンのパワーポイント
活用場面	行事の事後指導
ねらい	活動様子を思い出す手段とする。発表の手掛かりとする。
学習内容（子供の活動）	○活用方法 ・ねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊学習の様子を思い出す。 ・一番楽しかったことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○写真アルバムアプリを使用して、活動場面の写真をテンポよく見られるようにする。 ・子供たちの注意を集めるために、アプリを使用して提示する。 ○パワーポイントの中に、写真を入れる。 ・発表する際に、思い出す手掛かりとして使用する。画面を見て思い出したり、指差しして自分の気持ちを伝える手段とする。
反省（よかったところ・改善したほうがよいところ）	
<ul style="list-style-type: none"> ・事前指導でも同じアプリを使用して児童に活動場所等を見せたが、次々場面が変わったり音楽が聞こえてきたりするので、興味を持って見てくれていた。事後においても、写真を同じ提示の仕方にしたことで、同じように興味を持って見てくれたように思う。 ・発表の際にも写真を提示したことで、思い出す思考の助けとなったり気持ちを伝える手段となったりした。 	
今後の課題	
<p>アプリを自由に使える教師が限られており、負担が偏ってしまう。自分で使えるように努力しなければならない。</p>	

5 成果と課題

今回の授業実践では、学部行事の事前・事後学習、全校行事の場面でICTを活用することが多かった。写真や動画を提示することにより、児童が興味・関心を持って授業に参加することができていた。提示の仕方が、絵本よりもテレビ画面だと大きく見やすくなる、アニメーションを使用することで、次々と場面が変わったり、音楽が変わったりすることで、集中が持続するなど、写真や動画をテレビ画面で提示することが効果的であることが分かる。また、動画であると、言葉での説明を理解しにくい児童が動きを模倣して活動することが可能となり、ダンスでは映像に合わせて体を動かして声を出すなどして喜びを表現することにもつながる。さらに、何度も見ながら繰り返し行うことができるという利点もある。

おやつ作りの実践では、熱いものを扱うので、全員が一度に活動できないため、一人ずつ前に出て活動する。その場合、前に出る児童以外は、椅子に座って待つことになるが、前で行われている作業の手元をタブレット端末で撮影し、テレビ画面に提示することで、様子がよく分かり、待っている児童が興味を持ち、安全に観察することができた。

また、発語がない児童にとって、写真やアニメーションの使用により、指差しで気持ちを伝えることができるというコミュニケーション手段となることが分かる。

課題としては、動画を見る時間が長すぎたり、写真をただ提示するだけであったりすると、児童が飽きて、集中が切れてしまうので、工夫が必要である。提示することばかりではなく、児童の活動量を増やすことができるような使用方法を考える必要がある。アプリはたくさんあるが、児童に適切なものを選択しなければならないので、アプリの情報を収集して取捨選択することができる知識・技能が必要となる。アプリを使用したいが、どのようにすればよいか分からないという教員はまだ多く、アプリを自由に行うことができる教員は限られており、その限られた教員に負担が偏ってしまうというのが現状である。また、コードが短いと児童が使用しにくい、パソコンの容量が大きいファイルだと動きにくくなるなど、無線LANシステムを整備したり、容量が大きいファイルでも問題なく再生できるようなパソコンの整備をしたりすることも必要になってくる。

今後、必要となるのは、教員がICT機器に関する知識・技能を身に付けていくこと、ハード面の環境を整えることである。今回、授業にICT機器を活用することで、児童が興味を持って主体的に活動することが改めてよく分かった。しかし、各教員が自分の知識・技能が不足していることを感じたのも事実だ。それと同時に、多くの教員が学びたいという思いを持っていることが分かった。教員個人が授業で日々活用してはいるが、新たな知識・技能を得るためには、情報を得る機会や研修の場が必要であると感じる。夏休みに、グループ別研修のICT班の教員が校内研修として、iMovieを使用した動画教材の作り方を指導して、教員が実習を行った。その研修後、学級の授業でiMovieを使用する場面が見られた。そして、子供が興味を持って活動できる授業につながった。教員が授業で活用できる様々な方法を身に付けることにより、子供たちが主体的に活動する授業へとつながる。知的障がいのある児童にとっては、障がいの特性等による困難を改善・軽減できるものとして、これからますます活用されるべきものである。

しかし、本校では、テレビは2教室に1台、タブレット端末も2～4学級に1台、接続ケーブルが足りない、タブレットスタンドは教員の私物、教室でタブレット端末のインターネットを使用するときは私物のタブレット端末を使用するなど、ICT機器を活用する環境が整っておらず、機器を使用する授業が重なると結局使用できないというのが現状である。

このように、教員のICTを活用できる指導方法の習得や指導技術の向上のほか、個

々の子供に実態に応じたICT機器や支援機器の整備、子供一人一人が利用できる無線LAN環境の整備、ICT機器やネット環境、アプリケーション等に関する専門的な知識・技能を有する者の配置、障がいのある子供の特性等を理解した入力支援機器等の専門家の配置などが必要である。教員で専門的な知識・技能を有する者は限られているので、現在は、その教員の負担が増えている。教員の増員が望めないのであれば、「ICT支援員」の配置が必要であると考えます。

小学部内の研究を実施し、現状では、ICT機器をうまく活用している教員の使用方法を実際に授業を見に行くことで学ばせてもらい、個々の教員が知識・技術を習得して、学級で活用するという機会を積極的に作っていくことが大切であると考えます。個々に得た知識・技術を情報交換しながら、小学部全体で児童が主体的に活動できる授業を作っていきたい。

中学部 「生活意欲の向上・主体的行動の質を高める」ための授業実践

1 はじめに

平成29年度・平成30年度の2年間を通して、授業研究を取り上げ、一人一人の生徒が分かる授業を目指し、「生活意欲の向上・主体的行動の質を高める」ことに視点を置いた取組を行った。

授業実践を通して、児童生徒の実態に応じた学習内容の精選、児童生徒が見通しを持って活動できる教材・教具の工夫、一人一人の能力や活動内容に応じた支援の工夫の三つの視点を挙げ、分かる授業作りにつなげようと考えた。

2 目的

- 生徒一人一人が主体的に活動する授業を考え、実践する。
- 授業研究を行い、主体的な活動を引き出す授業についてまとめ、授業改善につなげる。
- 教科別の指導内容表を整理し、授業計画に役立てる。

3 方法

平成29年度は、全教員が指導案(略案)を立て、授業を行う。評価シートを活用し、授業の振り返りや分析を行う。

平成30年度は、国語、数学、体育の三つの教科に絞って、教員が三つの班に分かれて研究授業を行う。それぞれの教科について指導内容について整理し、各教科の段階別の指導内容表をまとめる。また、授業で扱う教材の共有化を図る。

- (1) 目標設定、実施計画等の立案
- (2) 授業実践
- (3) 研究授業の実施
- (4) 評価
 - ・授業研究を行い、目標に対して達成できたかどうか評価する。
 - ・課題の整理、まとめをする。

4 平成29年度の取組

- (1) 授業評価から出てきた改善点
 - ・授業を行う学級やグループの一人一人の実態把握について、授業者間で共通理解を図る。
 - ・実態を踏まえて、本時の目標に向かって個に対して、どのようなアプローチをするか授業者全員で意識統一を図る。ティームティーチングの授業の場合、サブで入る教員の動き方についても確認が必要である。
 - ・一人一人が活躍できる授業展開を工夫する。(得意なこと、好きなこと、好きな物を活動にうまく取り入れる。) 50分の授業の中で、一つでも活躍できるような活動内容の工夫を心掛ける。
 - ・生徒が、今何を求められているのかが、自分から分かるための工夫を考える。

- ・具体物、直接的な体験を取り入れながら、理解を図る。このことは、やってみることで生徒たちの記憶に残りやすくなると考えられる。
 - ・生徒がしたこと、反応、答え等に対する評価（褒める、褒美をあげる、間違いを正す等。）を、その都度、評価をしていく。授業中の評価を、生徒の意欲喚起につなげる。
 - ・習熟度が同じグループでの教科指導では、一斉指導と個別指導をうまく組み合わせで学習効果を狙う。
 - ・授業における一人一人の目標を明確にする。1時間の授業の中で一つの目標が基本である。
 - ・教科学習において自立活動の視点「子供が日常生活や学習場面で困っていることを改善・克服する」という視点を持って授業を組み立てることが大切である。例えば国語の授業で「他を意識する力」を「コミュニケーション」や「人間関係の形成」といった自立活動の区分に当てはめて考えると、群読では、自分の読むところと相手が読むところ、みんなで読むところがあり、一人だけで読むのとは違うことを意識することができる。
 - ・メリハリのある言い方、分かりやすい指示が大切である。
- (2) 生活単元学習の内容整理
- ・生活単元学習の単元の項目、指導内容、ねらいや目標について、各学年ごとに整理した。
 - ・表に整理することで系統性を持たせたり、教材・教具を共有できるようにした。

<平成30年度の取組>

国語班の実践

1 研究授業の実践について

(1) 授業のねらい

言葉は、生活において必要不可欠なものであり、国語科における言葉の学習は重要な役割を果たす。語彙力が向上することで他の教科等の学習の理解も深まることが期待できる。相手の話していることや本やテレビ番組の内容が理解できるようになり、生活がより一層豊かになる。また、自分から挨拶や質問、報告をしたり、自分の気持ちを言葉で相手に伝えたりするなどの主体的な行動が増えると考えられる。そこで、語彙力の向上を目標に、実態に合わせた学習内容や支援方法等を検討し授業を実践した。

(2) 活動内容の工夫

ア 単元設定の工夫

今回は、「うさぎとかめ」の詩を題材に授業を行った。この詩は声に出して読むことで言葉の響きやリズムを感じやすい詩である。また、「ぴよんぴよん」や「のそのそ」などのオノマトペが多く使われているため、オノマトペについての学習を深めることで語彙の増加が期待できると考えこの単元を設定した。

イ 実態に合わせた活動内容

授業を行う1年生2班について、これまでの授業は教師が一方向的に話して授業を進めていくことが多く、生徒が主体的に授業に参加しているとは言えない状況であった。まずは実態の把握を行った。「読むこと」に関しては、平仮名を読むのが難しい生徒や、すらすらと読めるが周りと合わせて読むのが難しい生徒、場面緘黙症の生徒など実態は様々であったが、どの生徒も主体的に参加でき、有意義な授業となるような活動内容や支援方法を考えていくこととした。

(3) 教材教具の工夫

生徒の理解がより一層深まるよう、写真やイラスト、動画などを使いながら学習を行った。テレビとタブレット端末を用意しておき、今までの学習を通して生徒が知らない言葉が出てきた際にすぐにテレビに映せるようにしておいた。オノマトペの学習の際には実物の亀やうさぎのぬいぐるみを用意し、実際に触れることで生徒自身から言葉を引き出せるような工夫を行った。また、クイズ形式で学習を行うことで楽しみながらオノマトペについての理解を図った。

(4) 教師の支援と手立て

ア 見通しを持って授業に参加するための支援

授業の始めに活動内容を提示し、毎時間同じ流れで授業を行うことで生徒が見通しを持って取り組めるようにした。

一時間の授業の流れ

- ① しりとりなどのゲーム
- ② 音読
- ③ オノマトペについて
- ④ 個別の学習
- ⑤ 振り返り

イ 一人一人に応じた支援

場面緘黙症の生徒については、発表の場面では自分の手元に用意したホワイトボードに発表したい内容を書いて全員の前で見せたり、音読の場面では、テレビに映した詩を音読に合わせて指示棒で指したりするなどした。詩をスムーズに読むのが難しい生徒に対しては、隣で教師が読み、それをまねして読むように促した。

また、授業中に大きな声を出したり離席をしたりする生徒については、行動ばかりに目を向けるのではなく、なぜそのような行動を取るのかという背景を考えた。その生徒は、何をやるか分からないときにそのような行動を取ることが多かったため、今やるべきことを明確に伝える、関心のあるものを取り入れたり、得意なことを活かす場面を設けたりするなどの支援を行い、授業に集中できるような環境を整えていった。

2 授業研究について

(1) 成果

ア 授業に対する意欲の向上

今回、生徒の実態を見直し活動内容や支援方法を考えて実践することで、生徒の授業に対する取り組み方が変化していった。以前は、教師からの一方向の授業が多く生徒が受け身になってしまっていた。しかし、実物やぬいぐるみに触れる活動を取り入れたり、一人一人が活躍できる場を設けたりすることで、生徒からの発言が増えたり、下向きがちだった生徒の顔が前を向くようになったりするなど生徒が主体的に参加するようになった。

イ 語彙力の向上

オノマトペの学習を行ったことで、国語の時間以外にも身近にあるオノマトペについて考えるようになった。例えば、クリスマスの電飾を見て「ピカピカ。」と言ったり、「今日はぽかぽかして暖かい。」と言ったりする生徒もいた。また、学習発表会でも国語班が「うさぎとかめ」を発表した際には、発表する生徒はよく親しんでいる詩であったため、自信を持って発表を行った。見ている生徒の中には発表に合わせて詩を読んでいる生徒もいた。

(2) 課題

今回、授業を行うに当たり生徒の実態の見直しを行ったが、実態の見直しを適宜行い、生徒にとってより効果的な学習となるよう活動内容や支援方法をその都度検討していく必要があると感じた。また、国語の担当の教師だけでなく、学級担任とも連携し、国語以外の時間における国語に関する実態や身に付けてほしい力についての情報交換を行うことも大切である。実態に合わせた効果的な学習を行うことで、国語の時間だけでなく日常生活における語彙力が向上し、生活意欲や主体的行動の質の向上につながることを期待できる。今後も生徒の実態に合わせた授業を実践していきたい。

3 教科の指導内容表について

岡山県特別支援学校長会・岡山県教育庁特別支援教育課の「岡山県特別支援教育課程指導資料」にある教科等の指導内容表を参考に国語の「読むこと」に関する項目を検討した。今回の単元である詩に関する項目は表1の通りである。生徒が楽しんで読むことに親しめるよう、生徒の実態をしっかり把握し、段階に応じた学習を実践することが大切であると感じる。

表1 指導内容表(詩に関する項目を抜粋)

	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階
読む	教師と一緒に絵本などを楽しむ。	文字などに関心を持ち読もうとする。	簡単な語句や短い文などを正しく読む。	簡単な語句、文及び文章などを正しく読む。	いろいろな語句や文及び文章を正しく読み、内容を読み取る。	目的や意図などに応じて文章の概要や要点などを適切に読み取る。
						1 図書館を利用し、小説、詩、俳句、和歌、エッセイ等、様々な趣味に関する雑誌などの読書に親しむ。

				2 自然や季節などの美しさを表した詩や紀行文などを読み、情景や場面の様子などを想像する。短い劇の脚本を読むことや演じることを通して、事柄の流れや登場人物の心情などを理解する。		
--	--	--	--	---	--	--

数学班の実践

1 研究授業の実践について

生徒一人一人が主体的に活動する授業を考え実践する。

(1) 授業のねらい

数学班では、実際の生活の場で学習したことが生かされ、成功経験を重ねることで、主体的に取り組む意欲も高まっていくのではないかと考えた。そこで、数学科において、生活に結び付いた具体的な学習活動を中心に据え、生活の場面に生きる数学の授業の在り方を考え、実践した。

本単元「買い物をしよう」では、生徒の実態に応じて目標を確認し合い、各学年の班ごとに授業に取り組んだ。(※表2 参考)

(2) 活動内容の工夫

ア 単元設定の工夫

実際の生活場面（遠足・修学旅行・郊外学習・文化祭等）につながる数学の学習単元を、学校行事や生活単元学習と関連付けて設定した。学校行事や生活単元学習、作業学習と関連付けることで、実際の場面を想定した目標設定や授業展開が行えた。

- ・「概数の表し方」の単元では、修学旅行前に、お小遣いの5000円以内でお土産をかうとすれば、どのように見積もるとよいかを考える場を設定し、買い物の疑似体験をする。(第6段階)
- ・「買い物をしよう」の単元では、遠足のお小遣い400円を自分で出す。400円で何が買えるかを考える。(第2・3段階)
- ・「買い物をしよう」の単元では、チラシを見て遠足のおやつ代300円で買えるお菓子を見つけて紹介する。(第4段階) 買い物ごっこの形式で、実際に近い形でお金と品物の受け渡しを行う。(第3段階)。

イ 目標の細分化

同じ1段階の生徒の中でも、①見えるところにある指定された品物を取り、教師に届ける。②見えないところにある指定された品物を取り、教師に届ける。③お金を持って品物置き場に行き、品物とお金とを交換して教師に届ける。というように、目標を区別することで、発達段階の異なる生徒と一緒に活動する内容を工夫していった。

(3) 教材教具の工夫

ア 具体物の使用

実際の生活場面に近い形で学習ができるようにできるだけ具体物を準備した。

- ・実際の硬貨（1円、5円、10円、50円、100円）を準備し、弁別する。
- ・自分で400円を準備するために、実際にカードにお金を貼ったものを用意し提示する。
- ・遠足や修学旅行で購入すると予想されるジュース、動物の餌、お土産等を準備し、実際の買い物場面を想起しやすくする。

イ タブレット端末の利用

生徒の実態に応じて、視覚的に分かりやすいタブレット端末のアプリを利用した。「TO DO MATH(トドさんすう)」では、数字や図形を指でなぞること



図1 授業の場面

でなぞった個所の色が変化するプログラムや神経衰弱の要領でペアとなる図柄をタッチしてマッチングの基礎を培うことができた。

文化祭の販売活動の際には、「レジスタディ」を活用しており、買い物で使うお金の種類、お釣り等が分かり、お金の計算が苦手な生徒もお金の受け渡しを行った。

(4) 教師の支援と手立て

単元の導入には、これからの活動に意欲を持って取り組めるように、実際の活動場面の写真やビデオを見た。また、事後には、御璽や生活単元学習と関連させ、買い物学習に出かける場面を設定し、学習が活かせるような言葉掛けをした。

授業では、ヒントとなるカードを用意し、それを見ることで、自分でできたという達成感が持てるようにした。ヒントカードは生徒に応じ作成した。

本物のお金を貼ったカード、お金の絵を描いたカード、丸を書いたカードなど、生徒に応じて活用した。弁別しやすいように、小箱にも表示を付けたり、活動が難しい場合には選択肢を提示したりするなど、生徒の実態に応じた最初にするこ

の声掛けなどの支援を行った。

概数の単元では、概数の表し方を提示したカードを用意した。大きな数の計算では、生徒に応じて計算機を活用して、目標が達成できるよう支援した。

2 授業研究について

(1) 成果

行事や生活単元学習、郊外学習と関連させて授業で取り組むことで、生徒は意欲的に学習に取り組んだ。活動の見通しが分かり、自分から買い物をしたいという意欲が生まれ、生活単元学習や学校行事等における目標を明確にしたことで、多くの生徒が達成感を持った。

授業においては、目標を明確に持つことで、同じ活動の中でも生徒一人一人応じた活動をすることができ、生徒も教師も見通しを持って取り組むことができた。

買い物学習においては、授業の中でもできるだけ実際の物、具体物を準備すること

で、生活の場面につながる授業展開ができた。

(2) 課題

授業において買い物場面を想定し、意欲的に活動したが、実際のお店では、レジの機械化が進んでおり、金額が分かってもどのように支払いをしていいのかわからない生徒が多くいた。生活単元学習との関連を図り、時代に合った買い物の方法を学習する必要がある。

また、支払いは、提示された金額より多い金額を出せばできることが分かるとできる。実際の生活場面に生かすことだけを考えれば、お金を多く出すトレーニングをすることも考えられる。

第2段階の生徒に、日生の時間に提示された金額を繰り上げてお金を出すトレーニングを行った。実際の買い物を想定して、提示された金額を繰り上げてお金を出すトレーニング（326円→百円玉4枚を出す。）（957円→千円札1枚を出す。）一人で活動できるよう、リングで留めた複数枚のカードを準備した。カードには、表に金額（出題）、裏に硬貨や紙幣のイラスト（解答）を載せている。最初の数字に注目すればそれでよく、その後の数字については考えなくともよい、ということが理解できてからは、学習効率が上がった。ちょっとした時間に取り組める学習活動なので、休み時間や帰る前の時間など、空いた時間に自分から取り組むことも多くなっている。生活単元学習や日生の活動との連携を継続して学習を行っていきたい。

表2 指導内容表

	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階
金 銭	1 買い物にはお金が必要なことが分かる。	1 教師や家のひとと買い物に行き、お金のやり取りをする。	1 簡単な買い物をする。	1 買い物やおつかいなどで、支払いに必要な計算をする。	1 決まった予算内で買い物をする。	1 予算を考えて、計画的に買い物をする。
		2 1円、10円、100円の金種が分かる。	2 5円、50円、500円の金種が分かる。	2 すべてのお金の種類が分かる。	2 等価関係が分かる。	2 計画的にお金を使うために、お小遣い帳を利用し、必要に応じて予算を立て、生活の中で活用する。
		3 10円、100円を使って値段と同じ金額を出す。	3 いろいろな種類のお金を使って値段と同じ金額を出す。	3 値段に見合ったお金を出し、お釣りをもらう。買い物の簡単な計算やお釣りの計算をする。簡単な両替をする。	3 現金の支払い方を工夫し、つり銭のある買い物をする。	
				1 計算機器を使って、簡単な計算をする。	1 必要に応じて計算機器を使って計算する。	1 計算機器を買い物や予算計画など、生活の中で活用する。
				2 定価・消費税、	2 レシートや領収	2 預金と送金、通

				各種カードなどについて知る。	書、お小遣い帳の書き方を知る。	帳残高、現金書留やキャッシュカードの利用と管理方法などを知る。
--	--	--	--	----------------	-----------------	---------------------------------

体育班の実践

1 研究授業の実践について

(1) 授業のねらい

体育班では、「生活意欲の向上・主体的行動の質を高める」ための授業の実践について話し合いを行った。

まず、「生活意欲の向上」については、生徒が各種運動を経験し、体を動かす楽しさや喜びを知ることによって日常生活の中でも体を動かそうとする意欲を喚起することができるのではないか。また、習得・向上した動きが様々な生活場面で生かされることによって、更なる生活意欲を高めることにつながるのではないかと考えた。「主体的行動の質を高める」ことについては、できなかったことができるようになる喜びや楽しさを感じたり、自分の立場を自覚し、自信を持って授業に取り組んだりすることで、生徒一人一人がより主体的に行動するようになるのではないかと考えた。これらのことを踏まえ、授業内容や活動方法、教師の支援等を検討し、授業を実践することとした。

(2) 活動内容の工夫

これまでは、一斉授業の形態で授業をすることが多かったが、授業の初めは、2班に分かれて「A体づくり運動」を行うようにした。1班（目標が「1段階」表3参照の生徒）に関しては、基礎的な動きの習得を目指して、ヨガマット、バランスボール、トランポリン、平均台、フラフープ、縄跳び等、様々な教具を使用して運動を行った。2班（目標が「2段階」の生徒）に関しては、馬跳びやフラフープを利用して、ペアや集団で運動することの楽しさを味わいつつ、運動量を確保しながら活動を行った。必要に応じて、その後の活動も2班に分かれて、それぞれの段階に必要な動きや活動を行ったり、全体で活動して集団で運動する楽しさを味わったりできるよう工夫した。50分という限られた授業時間ではあるが、できるだけ多くの時間、体を動かすことができるよう配慮して場の工夫も行いつつ、授業を進めた。

また、こうした授業実践を基に、今年度の学習発表会の体育班の活動は、「A体づくり運動」、「B器械運動」、「Gダンス」の要素を取り入れて行った。馬跳び、縄跳び、フラフープといった生徒に親しみのある運動や教具を取り扱うことで、生徒がより自主的に運動に親しもうとする意欲を持ち、練習に取り組むのではないかと考え、発表内容を構成した。活動を通して、馬跳びを経験したことがない生徒が思った以上に多いことやフラフープを投げてキャッチするといった動きを初めてする生徒もいるなど、生徒の運動に関する経験値に差があることや経験自体が乏しいことなどが分かった。しかし、発表会練習や授業を通して、能力や経験値に差があるものの、生徒たちは様々な運動をととても楽しみにしており、一人一人が意欲的に活動する姿に驚いた。生徒たちができるようになったことを喜び、教師が褒めることで更に自信を持って活

動し、成長していく場面を数多く見る事ができた。

(3) 教材・教具の工夫

授業前に、1時間の活動内容や班分けが分かる計画黒板を準備した。これは、生徒の出欠や教師の配置などを確認することに役立ち、生徒自身も見通しを持って活動できるようになった。

教具に関しては、日常生活の中でもなじみがある物を用いることで、より身近に体を動かそうとする意欲につながるのではないかと考え、様々な予算を活用し、トランポリン、バランスボール、ヨガマット、跳び縄、フラフープ、ラダー等を購入した。これらの教具は、授業の「A体づくり運動」を中心に活用し、幅広い活動や生徒一人一人の能力に応じた運動を行うことができた。また、体育の授業以外でも、トランポリンに関しては、普段は教室に置き、定期的に各教室を移動させるようにした。それ以外の道具は必要に応じて、各クラスに貸し出しをする形にした。トランポリンやバランスボールなどは、休み時間等を利用して生徒が進んで使用し、楽しんでいる様子が見られた。ヨガマットについては、教室で体幹トレーニングや体の柔軟性を高めるための運動を行う際に便利だった。身近にそうした道具があることで、ちょっとした空き時間を利用して運動に親しむことが容易になった。しかし、生徒一人一人に必要な運動や動きを習得させるためには、教師が意識して取り入れ、生徒へ言葉掛けすると同時に、安全面にも配慮した対応が必要だと感じた。

(4) 教師の支援と手立て

体育の授業は、複数の教師が多くの子と関わりながら授業を行うため、教師間での共通理解が必要となる。そこで、学習指導要領解説等を基に、「A体づくり運動」「B器械運動」、「C陸上運動」、「D水泳運動」、「E球技」、「F武道」、「Gダンス」、「H保健(きまり)」の各項目に分けて、目標や内容を分かりやすいように整理した。学習指導要領や解説では、「1段階」、「2段階」に分けて各項目の目標や例示が示されているため、各項目で「1段階」と「2段階」を見比べにくい点があった。そこで、各項目別にその運動の目的を示し、「1段階」「2段階」の目標を技能、思考、態度の順に並列して表にまとめ、例示や発達段階表も添付したものを作成した。(表3)授業に取り組む際、これを用いることで、生徒一人一人の実態を発達段階表で確認し、どの段階の目標で取り組むか検討しやすくなった。また、教師間の共通理解の助けにもなり、活動内容についても、目標やねらいが明確となり、例示に示されている内容を参考に様々な動きや活動が意図的に行えるようになった。

授業に関しては、可能な限り、生徒一人一人に必要な支援を行おうとしたが、教師の人数に限りがあり、ある程度動くことができる生徒に対しては、口頭での指示や指導が多く、細かな動きや正確な動作に関する指導は十分とは言えなかった。また、経験を積むごとに生徒一人一人の能力差は広がっていき、それに対する対応も検討していかななくてはならないと感じた。

2 授業研究について

(1) 成果

これまでは、指示を出す教師が主となって授業を進めていくことが多く、教師間での共通理解が十分ではなかった。しかし、今回、授業研究を行うに当たって、話し合いを重ね、個々の目標段階を確認したり、教材・教具の工夫や場の設定を工夫したりと、体育を担当する教師全員が目的や目標を意識して授業に取り組むことができた。

教師が生徒一人一人に獲得させたい動きやねらいを意識することで、生徒への言葉掛けや支援がより具体的になり、そのことを受けて生徒も意識して動こうと努力する姿が見られた。また、指導形態や場の工夫により、生徒が短時間で様々な運動を経験し、運動量を確保することができた。中学部のテーマである「生活意欲の向上・主体的行動の質を高める」ための授業の実践を目指して授業研究を行ってきたが、生徒一人一人が運動を楽しみながら、積極的に活動する様子から、研究の方向性としては間違っていないと感じた。

(2) 課題

今回取り組んだ「体づくり運動」に関しては、1班の生徒は自立活動的な要素が多く含まれていた。生徒の実態に応じて新たな動きを獲得させようとする、体の使い方から丁寧に指導する必要がある。体育の授業だけでは動きの獲得をすることは難しく、クラス担任と連携しながら日常生活の中でも取り入れてもらうことで動きの定着を図る必要性を感じた。2班については、30名程度の生徒を2名の教師が指導することになり、一斉での指示理解が難しい生徒については、活動を十分に理解できていないことがある。教師のそばに座らせたり、活動が始まった際に教師が確認したりするなどの配慮が必要である。また、「サーキット運動」に関しては、短期間で正確な動きを獲得することは難しく、マット運動で危険だと思われる場面やラダーの踏み越えで正確な動きができていないなど細部の指導が不徹底だった。今回は、生徒に様々な運動を経験させ、体を動かすことを楽しみながら運動量を確保することを優先して授業を行い、生徒も十分に活動を楽しんでいたが、安全面や正確性といった点で配慮が必要だった。指導する教師側からすると、指導を重ねていくにつれ、生徒一人一人の能力差が大きくなり、一人一人に対する指導方法や対応に悩んだ。教師の配置や評価の観点などについて、教師同士でより話し合いを重ね、連携・確認しながらよりよい授業を目指していく必要があった。

体育で習得した動きや技術は、体育の授業だけで活用されるだけでなく、日常生活の中でも大変重要な力になり、様々な場面で活用され、将来につながっていく。一人一人のよりよい成長を願い、生涯スポーツにつながる体育の授業を目指し、各担任との連携を図りながら、今後も「生活意欲の向上・主体的行動の質を高める」ための授業の実践を進めていきたい。

高等部 高等部におけるキャリア教育の取組

1 はじめに

高等部では、キャリア教育の視点による授業改善を進めてきている。平成24年度から、「授業における観点位置付け・授業改善シート」を活用し、高等部の授業においてキャリア教育の「4領域8能力」の観点がどのように含まれているかを確認し、教師自身のキャリア教育への意識を高めた。平成26年度からは、愛媛県下で「愛顔のえひめ特別支援学校技能検定」（以下、技能検定）がスタートし、技能検定への取組を踏まえたキャリア教育の推進に努めている。産業科は技能検定に向けた取組を「キャリアトレーニング」と称して実践的に取り組み、普通科は清掃の取組に関して、日々の教育活動の中で実践的に取り組んだ。平成28年度には、キャリア教育の「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」の観点に整理し、普通科においては高等部3年間の生活単元学習等の指導内容を一覧表に整理した。産業科は、キャリアトレーニングの授業を作業学習の一環として位置付けて取り組んだ。

「キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育である。」（平成23年中央教育審議会答申）と定義している。菊地（2013）は、「キャリア教育とは、能力や態度の育成をとおしてキャリア発達（社会の中で役割を果たすことを通して自分らしく生きる過程）を促すことであり、教師が児童生徒に教え込む性質のものではなく、児童生徒本人が授業や、学習上・生活上経験したことについて『振り返り』をとおして言語化や文字化することにより、自分なりに意味づけ、価値づけ、重みづけ、方向づけしていくことを重視し、支援によってその変化、発展を促すものである」と述べている。このことを踏まえ、キャリア教育の視点から生活単元学習や作業学習等の授業内容を検討することには大きな意味があると考えられる。

そこで、高等部では平成29年度から、日々の授業をキャリア教育の視点から見つめ直す授業研修（研究授業）を行った。授業研修後には授業研修会を行い、系統性のある授業内容や生徒の実態に即した授業実践について話し合った。産業科では引き続き技能検定に向けたキャリアトレーニングの取組の充実を図りながら研究を進めた。また、生徒が見通しを持って活動できる教材・教具の工夫・管理方法について検討した。

2 研究の目的

- (1) キャリア教育についての理解を深める。
- (2) キャリア教育の視点から授業内容を見直す。
- (3) キャリア教育の視点から教材・教具の工夫や活用等について考える。

3 普通科・産業科の取組

(1) 普通科

ア 授業研修

平成29年度は全学級で指導案を書いて、生活単元学習の授業研修を行った。キャ

リア発達につながる授業について考えるため、高等部全体で声を掛け合い、授業参観を行った。また、授業参観者は授業評価シートを使って、授業改善につなげるよう参観した授業を評価し、授業者に手渡した。平成30年度は各学年で1学級、指導案を書いて生活単元学習の授業研修を行った。授業後には授業研修会を行い、キャリア発達につながる授業について話し合った。授業評価シートの活用も継続した。

イ 各学年の取組

表1は、平成28年度に普通科において高等部3年間の生活単元学習等の指導内容を一覧表にまとめたもの（一部抜粋）である。本校のキャリア教育全体計画に示されている、日常生活の指導・生活単元学習・総合的な学習の時間におけるキャリア教育の指導のねらいや清掃活動に関する指導内容が示されている。平成30年度は、生活単元学習の単元を清掃活動に絞って取り組んだ。次の（ア）～（ウ）は各学年の指導案と授業研修会の内容を一部抜粋して示している。

表1 領域・教科を合わせた指導等の指導内容一覧表

キャリア教育全体計画との関連(各教科・領域等におけるキャリア教育指導のねらい)						
日常生活の指導		生活単元学習			総合的な学習の時間	
		<ul style="list-style-type: none"> ・集団生活に必要な活動を自分で判断して行動する。 ・TPOに応じた言葉遣いや礼儀を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後の生活に必要な知識、技能や態度を身に付ける。 ・消費生活や余暇活動など、生活を豊かにする活動に主体的に参加する。 			<ul style="list-style-type: none"> ・主権者としての自覚を持ち、身近な地域や国際社会への関心を深める。 ・産業現場の人や卒業生と交流し、進路について意識を深める。
			1年	2年	3年	
日常生活と家庭生活の自立	住生活 清掃活動	<ul style="list-style-type: none"> ・整理整頓 ・清掃 ・清掃用具の適切な使用 ・場所等に応じた清掃方法の理解 ・校内美化に努めようとする意識付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・快適な住まい ・掃除の仕方(技能の向上(技能検定も活用)) ・清掃用具の名前 ・雑巾の絞り方 ・机の拭き方 ・モップの使い方 ・ダスタークロスの使い方 ・掃除機(ごみ取り) ・窓拭きの仕方(スクイージ) ・トイレ掃除 ・ごみの出し方、分別 			<ul style="list-style-type: none"> ・住まいと街 ・共同生活を考える ・ボランティア活動(地域の公民館、保育園等) (関連行事：クリーン運動)

(ア) 1年生の授業研修における指導案（一部抜粋）

単元名	丁寧な掃除に取り組もう	場所	自教室
指導計画	1 掃除について知ろう・・・2時間	本時 主題	○プロから学んだ掃除の仕方を他のクラスに教える練習をしよう
	2 身近な物で掃除をしよう・・・1時間		
	3 掃除のプロから学ぼう・・・1時間	本時目 標	○掃除の仕方を教えることを通じて、丁寧な掃除の取組への意欲を高める。 ○友達の発表の良いところに気付き、自分の発表に取り入れる。
	4 掃除の仕方を伝えよう・・・5時間 (本時その4時間目)		
	5 まとめ・・・・・・・・・・・・・1時間		
学習活動		教師の支援と手立て	
2	発表練習を行う。 ・ワークシートの内容に沿って机拭きをチームごとに行う。 ・ワークシートの内容に沿って自在ぼうきでの掃除をチームごとに行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・1年A組(に伝える)チームとB組チーム、C組に伝えるチームと、E・F組チームに分かれ、それぞれ15分発表、5分振り返りを行う。 ・相手チーム発表時は、評価シートを利用して相手の発表の良いところを記入し、振り返りの時間に伝える。 ・T1はD組チームに付き、生徒Cが発表内容を復唱できるよう、小声で伝える。 	

授業研修会の内容（一部抜粋）

参観者2:生徒Eは、人によって教える内容は変わるのか。
 授業者 :生徒Eがどれだけ覚えているかにもよるが、三つのポイントは必ず教えようと伝えている。生徒Cには、「何で、こうやった?」と聞くと、自分で気付いて正しくやり直すことができる。

参観者2:自分のクラスの生徒は、3つ全部は難しい。自在ぼうきの「スー、トン」の仕方ができれば、繰り返し行うことで理解は広がると思う。

参観者3:生徒Dは、中学部でもやっていた。中学部では自在ぼうきを使うときに、濡らした新聞紙をちぎってまいて行っていた。通常の中学校からの生徒は経験はないが、手順表や評価表などをラミネートするなど工夫したり、個別にホワイトボードで説明したりすれば理解が深まると思う。

参観者4:自分が学んだことを人に教えていくことは大変である。練習してできたことを、生徒Bは声は小さいが段々友達に教えることができている。授業の途中で廊下に小学部が来たが、掃除に集中してやれていた。自分のクラスでも、日頃から生徒にやらせていくことを意識している。些細なことでもやらせて続けていくことで成長につながっていく。生徒が協力して学習し、教師がフォローすることで、掃除の仕方が着実に身に付いてきている。

参観者5:教わったことを自分でやる。またそれを人に伝えることは難しいことである。毎日やって自分でできるようになり、誰かに伝えて感謝されることで自信にもつながっていく。今回の掃除で学んでいることは普段の生活でもできているか。他のクラスにも伝えるに行くようになるが、取り組む前と取り組む後で変わったことはあるか。

授業者 :生徒Aは、自分から机拭きを意識して行うようになった。生徒Eは廊下掃除を行っている。「学んだでしょう。」と伝えると、覚えたことをやるようになった。生徒Bは丁寧にやるのが苦手であり、何度も言葉掛けするとしぶしぶではあったが、段々やるようになってきた。

参観者6:本時の机拭きでは、乾拭きを行っていたが、本来は水拭きになるのではないか。
 授業者 :雑巾の絞り方も学習している。今回は雑巾の持ち方と拭き方を重点的に伝える。

参観者6:自在ぼうきは、より良い物の準備が必要である。教える立場、教える力の意義を感じた。卒業後につながる力として、普通科での取組や、今後の他のクラスへの広がり期待している。産業科の技能検定が、技能検定のためだけににならないよう、よりつながりのあるものにできればと考えている。生徒以上に教員が清掃に関する共通理解が必要である。

参観者7:今回は掃除の仕方について、教わったことを伝える、情報の伝達の仕方が重要で、「要点はここだよ。」と、明確な伝え方が必要になってくる。また、気持ちよく生活する、有効に生活するためのもの、道具の使い方においては、どう伝わるか、手順を教えていく中で、今のはどこが良かったのか。教師は、疑問を投げ掛けながら、「今の良かったと思う?」「そうだね。」など、確認しながら理解を深めることも大切になる。

(イ) 2年生の授業研修における指導案 (一部抜粋)

単元名	掃除の仕方を見直そう	場所	自教室
指導計画	1 掃除の意味・・・・・・・・・・2時間	本時 主題	○自分の掃除の仕方を見直そう
	2 普段の掃除を見直そう・・2時間 (本時その2時間目)		
	3 実践してみよう・・・・・・・・2時間		
学習活動		教師の支援と手立て	
2	普段の掃除方法を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> 前時で記入したプリントを基に、生徒A・C・E・F・G・Hが掃除の手順を発表するように促す。 絵カードや写真カードを使って、生徒B・Dの発表を支援する。 	
3	自在ぼうきの使い方を確認し、掃除の仕方を見直す。	<ul style="list-style-type: none"> 自在ぼうきを使った掃除の仕方について、動画等で例を見せて、確認する。 	

授業研修会の内容 (一部抜粋)

参観者1:黒板に貼っていた文字カードの文字が小さかった。自分の高2Cクラスでは、この大きさでは見えない生徒がいる。もう少し大きく太い字で提示する必要がある。また、生徒Dには、マッチングするような課題であれば活動できるのではないか。

参観者2:授業者の優しさが授業に表われていた。生徒Dや生徒Fに対して無理強いせず、生徒Fには発表後の礼だけでもなど、今できることを促していた。掃除の仕方については、映像を見たり、実際にほうきを使ったりするなど効果的であった。

参観者3:生徒Fを1年次に担当したが、発表はできなかった。終わりの会では、帰りのバスの時間まで粘っても言えなかった。たまに言えることもあったが、定着しなかった。自在ぼうきの使い方については、1年次に生徒Hをはじめ、清掃会社のキャリアガイドから指導を受けている。現場実習において、自在ぼうきを使う場面があった生徒が、親指を上にしてほうきを持つことさえできなかつ

た。日頃の清掃の指導の大切さを感じた。

参観者4：板書の文字カードの字が小さいと感じた。掃除に関する単元は、大事な内容である。1年次に掃除の学習をしたとのことだが、自分のクラスの生徒は、きちっと掃除ができていない。生単で取り上げて授業で指導することは大切である。

参観者5：自評の中で、プリントの内容に課題があったとのことだが、どのように作るべきだったか。板書とプリントの内容に相違があった。プリントに文字を書かせる場合、書き写しさせるのであれば、板書とプリントの内容を合わせなければならない。理解力のない生徒は、プリントに書き込めない。

授業者：板書のとおり書くよう、生徒に伝える予定だったが、生徒への質問を通して手順を記入していくと、生徒からの意見が予定していたものと違っていた。自在ぼうきの使い方に三つ項目があったが、生徒F・Gは記入できていた。プリントにも番号を打ってやれば良かった。一項目ずつ、板書を見ながら書かせていく進め方もあった。授業を振り返って課題を感じている。

参観者6：今回は、高等部の普通科として、清掃に関する生活単元学習の授業を依頼した。本時の授業で生徒たちは、日頃の清掃について発表できていた。日頃の清掃と技能検定で行っている清掃が、何らかの形でつながるようになってほしい。参観者3が言ったように、自在ぼうきの持ち方から指導が必要な生徒もいる。つながりの在り方を考えていきたい。

参観者7：写真を通して、生徒たちは内容を確認しながらプリントにまとめていた。文字も丁寧に書けており、自分で内容が振り返られるものになっていた。自在ぼうきやちりとりなどの使い方など、具体的な手順が示されており、文章にすることが大切だと感じた。自分のクラスでも学習したい。

参観者8：この単元計画の最初に、掃除の意味について学習してある。生徒たちはどのように意味を捉えたか。

授業者：どうして掃除するかについて、生徒に聴くと、「きれいにすると気持ちがいい。」と答えていた。人のためや貢献することなどについては言及していない。

参観者8：何のために掃除をしているのか、その確認が、本時においても最初にあると良かった。普段の先生と生徒との関わり、教える目的は何か。生徒たちは先生の期待に応えようとしている。今何を考えようとしているのかが大切になる。

(ウ) 3年生の授業研修における指導案 (一部抜粋)

単元名	家の掃除をしよう	場所	自教室
指導計画	1 机拭きのプロになろう・・・2時間	本時 主題	○卒業後の生活で身近な道具を使い、掃除が行えるようになる。
	2 自在ぼうきを自在に操ろう・1時間		本時目 標
	3 掃除機で掃除をしよう・・・1時間		
	4 自分の家にある掃除道具を知って掃除をしよう・・・・・・・・・・2時間 (本時その1時間目)		
学習活動		教師の支援と手立て	
2 掃除道具の説明を聞き、掃除道具を実際に使って清掃する。 ・様々な掃除道具を見て、何を使うかを理解する。 (ダスタークロス [ドライ・ウェット]、ハンディーマップ、粘着カーペットクリーナー)		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒A・B・C・Dが話集中するよう言葉掛けを行う。 ・生徒E・F・Gが進んで発表するように促す。 ・生徒A・B・Cが掃除道具の使い方を確認しながら指示する。 ・生徒D・E・F・Gが一人で行えるところは見守る。 	

授業研修会の内容 (一部抜粋)

参観者1:3年間を見越した活動についてどうだったか。清掃道具の使い方は上手になったか。1・2年の積み重ねはどうだったか。

授業者1:このクラスは2年生からの持ち上がりで、1年生での取組は分からない。2年生で机拭きや自在ぼうきの使い方を練習した。3年生では、卒業後の家庭生活での清掃に目を向けた。

参観者1:ハンディーマップやカーペットクリーナーなどは、身の回りの掃除に便利である。業者が使うプロの道具から、身近な家で使う道具の使い方へと学習を進めていくのがいいのかわ。身近な道具から、専門的な道具について学習を進めていくのがいいのかわ。学校の掃除がベースにあり、身近な道具から専門の道具、専門の道具から身近な道具、どちらも進め方としては考えられる。普通科では身近な道具、実践につながるもの、自分の身の回りにあるものの理解が深まることが大切になってくる。

参観者2:産業科ではプロの清掃につながるよう取り組んでいるが、本時で行った家庭生活に生かすための学習は産業科にも必要だと思った。本時の学習で、教師が道具の名称などを伝えて、生徒が道具を持ってくる場面があった。道具が分からない生徒に対して、使う場所や道具の特徴など、言葉掛けが上手で答えた。

引き出し方も参考になった。いろいろな掃除道具があり、自分のクラスの授業でも生かしたい。

参観者3:身近な掃除道具ということで、家の中で具体的にどのように生徒が掃除をするのか考えることができた。学校で行っている掃除が、家ではこう使える。生徒の実態に合わせて考えながら考えていくことができ、冬休みにつながる内容だった。テレビ画面を使って道具の紹介もあり、生徒たちは集中していた。

参観者4:本時で使用した道具について、家でもやってみようと思った生徒はいたか。

授業者2:冬休み中の手伝い表も作成した。モップをやろうという生徒がいた。

参観者4:卒業後の働く力として、一般事業所、福祉事業所どちらにおいても清掃は必要である。大洲の福祉事業所で働く卒業生が、仕事終わりの片付けで、ほうきで掃き掃除をしている様子を見た社長が、学校で何を教わったのかと話していた。ごみを集めるわけでもなく、ほうきでごみを掃くだけの掃除をしていたという。基本的な清掃のやり方は、身に付けておく必要がある。

参観者5:生徒の授業に対する姿勢がとても良かった。普段の生活指導が十分浸透している。本時を通して、家庭に帰っての掃除について考えることができた。本時では、実物と名前のマッチングをしていた。道具一つ一つには意図されたものがある。名前だけでなく、用途とのマッチングもあっても良いのではないか。清掃の学習については、段階的なものと着地点を考えていく必要がある。

ウ まとめと今後の課題

授業研修や授業研究会から次のことが考察できた。

(ア) 普通科での清掃活動について

高等部1年生では、キャリアガイド教室を実施し、清掃業のプロから掃除の仕方を学ぶ学習を設定している。平成30年度は、普通科の1年生が36人と多く、一斉にキャリアガイド教室で学ぶことが難しいことから、1年C組を代表として、キャリアガイド教室を行った。そこで学んだ内容を友達に伝え、清掃の正しいやり方を周知するよう取り組むことで、清掃技能を向上させるとともに、コミュニケーション能力も向上できるよう取り組んだ。

高等部2年生では、1年生で学んで清掃のやり方を生かして、日々の清掃を見直すことを行った。自在ぼうきの正しい使い方を振り返り、それぞれの清掃場所での清掃手順を見直すとともに、自分たちの清掃について友達に分かりやすく伝えるよう取り組んだ。

高等部3年生では、学校での清掃から家庭での清掃について考える取組を行った。家庭で使える手軽な清掃道具について学び、自分が家庭で行う清掃について、友達に分かりやすく伝えよう取り組んだ。

清掃活動については、基本的な技能を身に付け、清掃場所や状況、時間に合わせた清掃を行っていく必要がある。また、生徒の実態に合わせて、やり方を柔軟に修正していくことも大切になる。学校から家庭、職場につながるよう、清掃のポイントを押さえて指導支援していかなければならない。

(イ) ポイントを絞った学習について

高等部1年生では、三つのポイントを整理し、机拭きや自在ぼうきの学習を行った。指導する清掃方法を絞り込み、ポイントを押さえて伝えることが効果的であった。例えば自在ぼうきの使い方のポイントとして、①「自分の前」（ほうきを動かす場所）、②「スー、トン」（ほうきの動かし方）、③「ほうき半分入れる」（ちりとりへのごみの移し方）の三つのポイントを示して伝えていた。卒業後の生活を見据えながら、生徒一人一人の目標を持って取り組み、一日一日の生活に結び付けていくことが大切になる。

(ウ) 人の役に立つ取組、人に感謝してもらえぬ経験について

清掃の基本を身に付けることで、清掃への意欲が高まり、主体的な取組が増え

ていく。清掃を通して、友達にやり方を伝えたり、協力して取り組んだりすることで、周りからも感謝され、任された清掃場所に責任を持って取り組み、その場所を使う人のことを考え、気持ち良く使えるよう思いやる経験を積み重ねていくことで、自信が深まっていく。

(エ) 評価について

生徒自身が確認できることと、教師や時には友達から確認してもらうことが大切になる。一方通行にならないような相互確認が必要である。平成26年度から始まった技能検定を受けて、その年に普通科の生徒に取り入れられそうな部分を整理した評価表を作成している。生徒の実態に応じて活用し、技能向上を目指すとともに、生徒自身が意欲的に目標を持って取り組めるような工夫が必要である。

(オ) 教材・教具の工夫や管理について

清掃活動については、活動を積み重ねていく中で、評価表だけでなく、清掃の手順に関するワークシートを作成しており、それらを教師間で共有する必要がある。そこで、データの保存場所を明確にし、誰でも気軽に活用できるように、「高等部」「教材・教具」のフォルダを作成し、教科や活動ごとに分類して整理している。しかし、ネットワークが学習系・校務系にシステムが分かれ、フォルダの場所も分かりにくく、データの提供や利用等が低迷している状況がある。保存場所の見直しを行い、データ整理についても誰もが簡便に利用できるよう見直していく必要がある。

(2) 産業科「キャリアトレーニング」の取組

技能検定が始まり5年が経過した。近年の就職希望の傾向として、清掃業や小売業、介護などへの就労が増えている。技能検定では実践的な経験が深められるため、就職希望者には大切なものとして取り組んでいる。

技能検定に向けての練習では、手順や技術の習得に時間が掛かるため、継続した取組が必要であるが、練習時間の確保が難しい状況であった。生徒の将来に直結する技能検定の練習時間の確保と継続した指導を保障するため、「キャリアトレーニング」に取り組んでいる。

ア 「キャリアトレーニング」について

(ア) 目的

「キャリアトレーニング」は、技能検定と同様に、生徒が目標を持って取り組むことや、身に付けた力について産業現場の専門的な評価を受けること、この取組を通して、生徒の働く意欲や自信につなげていくことなどを目的に取り組んでいる。また、障がいのある生徒の力を、社会や事業所にアピールしていく狙いもある。

(イ) 内容

表2 技能検定実施種目

部 門	種 目
清掃サービス部門	机拭き、自在ぼうき、水拭きモップ、ダスタークロス、掃除機、事務所清掃①・②
接客サービス部門	喫茶サービス
販売実務サービス部門	商品化、運搬・陳列
情報サービス部門文字	入力、文書作成

表2は技能検定で実施される種目を示したものである。検定内容については、清掃は、机拭きや自在ぼうき、水拭きモップなどの六つの種目があり、作業準備から、清掃、片付けまでの一連の検定になっている。机拭きや自在ぼうきなどの五つの基礎的種目は、地区検定として本校で実施し、幾つかの種目を合わせて行う事務所清掃は県検定として行われた。接客は喫茶店でのお客さんへの対応、注文を取り、飲み物を提供するなどの一連の検定になっている。販売実務は、スーパーでのバックヤードにおける野菜や果物の袋詰めを、エプロン付けから、手洗い、袋詰めなどの一連の検定になっている。運搬・陳列の種目は、段ボールに入った商品を倉庫へ運搬・整理し、店舗の陳列棚にペットボトル飲料を品出しする検定となっている。また、情報サービス部門では、パソコンでの文字入力や文書作成を行う検定となっている。どの検定も、身だしなみや連絡、報告、準備、片付けなどを確実にを行う必要がある。これら4部門の検定に向けて、生徒が目標や意欲を持って、主体的に取り組めるよう、繰り返し検定の練習を行い、評価表や日誌を通して、活動を振り返り、今の自分の力を確認しながら進めていった。

(ウ) 作業学習との関連

高等部では、6班の作業班があり、本人や保護者の希望を取り、それぞれの作業班での活動を行っている。作業学習では、自立と社会参加を目指し、職業人・社会人として必要な知識・技能・態度の基礎を身に付けることを目的にしている。作業を行いながら、働くことの大切さや持続力、コミュニケーションの力など、働くために必要な能力や態度など、基礎的な力を育てている。これらの取組に加え、清掃・接客・販売実務・情報などの分野においても同様に取り組んでいくとともに、「キャリアトレーニング」を通して、物作りではなく、技能検定のテキストを利用しながら、お客様に対するおもてなしの心を育み、個々の目標を持ち、明確な評価を通して働く意欲や自信を深めていきたいと考えている。

(エ) 班編成 (平成29年度)

表3 1学期の班編成

部門	清掃	接客	販売実務	情報
生徒数	16人	12人	13人	8人
教員数	5人	3人	3人	2人

表4 2学期の班編成

部門	清掃	接客	販売実務	情報
生徒数	16人	12人	13人	8人
教員数	5人	3人	3人	2人

キャリアトレーニングは、高等部産業科の生徒を対象に、学習を進めている。活動班は、清掃・接客・販売実務・情報の4班で、班編成は、生徒の希望に添って行った。キャリアトレーニングの取組は4年を経過し、1・2級を取得した生徒は、更に広い見識や能力の育成に向けて、他の種目を選ぶよう、生徒に伝えている。1年目は高等部1・2年生を対象としていたが、2年目から高等部産業科全員を対象として実施した。また、普通科で希望する生徒も、清掃、販売実務、情報で活動した。表3・4は、1学期・2学期の班の構成人数である。清掃班は種目も多く、指導教員は5名配置し、清掃を希望する生徒も多かったため、班の人数は、3年目も4年目も最も生徒数の多い班になっている。販売実務は新たな種目が増え、活動を希望する生徒も増え、二番目に生徒数の多い班になっている。

(オ) 時間

表5 高等部産業科週時程表（平成29年度）

校時	月			火			水			木			金		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1	美術	英	数	作業学習			国語	理科	美術	総合	数	国語	数	美術	社
2	美術	英	理科				情	音楽	美術	作業学習			国語	美術	音楽
3	音楽	HR	生				HR	生	音楽				生	数	国語
4	情	音楽	生				音楽	生	数	生	数	生	国語	総合	
5	理科	国語	英				数	総合	HR	職業			作業学習 (キャリア トレーニング)		
6	体育						体育								

表5は、高等部産業科の週時程表である。キャリアトレーニングは、作業学習の中に位置付け、金曜日の午後に行っている。作業学習の時間は、普通科が週8時間、産業科は11時間あり、産業科の火曜日の作業学習は終日行っている。産業科の1年生は、学期毎に一つずつ作業班を経験できるようにしている。普通科1～3年生、産業科2・3年生は、1年間一つの作業班に属して、作業学習を行っている。

(カ) 日程

表6 日程表（平成29年度）

① キャリアトレーニングについて(日程)		
1学期	2学期	3学期
① 4月27日	⑨ 9月8日	⑲ 1月19日
② 5月26日	⑩ 9月22日	⑳ 1月20日:清-販
③ 6月2日	⑪ 9月29日	㉑ 1月26日
④ 6月9日	⑫ 10月6日	㉒ 2月2日
⑤ 6月16日	⑬ 10月13日	㉓ 2月9日
⑥ 6月30日	⑭ 10月27日	㉔ 2月16日
⑦ 7月7日	⑮ 11月10日	㉕ 2月23日
⑧ 7月14日	⑯ 11月17日	㉖ 3月2日
㉗ 8月3日:情-販	㉘ 12月2日:清	㉖ 3月9日
㉙ 8月4日:清-接	㉚ 12月8日	
	㉛ 12月15日	
	㉜ 12月22日:接-情	

○:地区検定(清掃サービス5種目) ◎:県検定(清掃-接客-販売実務-情報)

※ 産業科の2・3年生に希望調査(前年度)
 ※ 産業科の1年生に希望調査(4/4) ※ 金曜日の5・6校時

表6は「キャリアトレーニング」の日程である。毎週金曜日の5・6時間目の作業学習の時間に行き、行事や学年での活動でキャリアトレーニングの時間が取れないこともあったが、1学期に8回、2学期に10回、3学期に8回、計26回のキャリアトレーニングの時間を組むことができた。一重丸が清掃部門の地区検定、二重丸が県検定のあった日を示している。3学期は、技能検定が終わり、他の班の見学や体験の時間を設け、来年度に向けて新たな1・2年生の班を編成し、実施していく計画である。下線で記している日は、キャリアアドバイザーに来校してもらい、実技指導を実施した日である。技能検定に向けて、繰り返し取り組む中で、一つ一つできることを増やしていき、確実性を身に付けていけるよう取り組んだ。

イ 実技指導アドバイザー

実技指導アドバイザーによる実技指導では、限られた時間の中で、貴重なアドバイスを得ることができた。清掃では、道具の扱い方や清掃手順のポイントを指導してもらいなど、専門的な視点で、生徒の実態を見てもらい、生徒に合わせて具体的なアドバイスをしてもらった。教員が間違っていて教えていることもあり、指導方法も

含めてアドバイスしてもらうことで、生徒は、とてもスムーズな動きができるようになった。接客においては、接客の手順や技能、言葉遣いに関することなどをアドバイスしてもらった。ただ言葉を伝えるだけでなく、心を込めて、おもてなしをすることの大切さを教えてもらった。販売実務においては、商品を運ぶカートラックやカット台の扱い方、品出しの方法などについて、分かりやすく教えてもらった。道具や商品を扱う場面でのお客様への対応や意識の持ち方についても教えてもらった。情報においては、実技指導アドバイザーは利用していない。また、清掃に関しては、実技指導アドバイザーとしてだけでなく、キャリアガイド教室の講師として、普通科の清掃も指導してもらった。机拭きのやり方や自在ぼうきの持ち方、ちりとりやほうきの使い方など、分かりやすく指導してもらった。実技指導アドバイザーのアドバイスを受けて、教員自身がしっかり清掃の知識を持って、日頃の清掃に携わらなくてはならないことを改めて実感した。

ウ 技能検定

(ア) 認定級取得者数

図1は過去8回の技能検定での状況である。キャリアトレーニングを行い、技能検定に臨んだ生徒たちは、それぞれ取得した級は違うが、確かな経験を積んでいる。図1は、8回の技能検定で取得した級とその人数を示したものである。左から順に第1回、第2回、第3回という順に示している。本校からの受検者数は毎回増えており、1級取得者も増えていたが、第7回は国体の関係で地区検定が実施されず参加人数も少なく1級取得者の数も減少した。過去の検定で、1級を取得した種目別人数は、机拭き18名、自在ぼうき11名、水拭きモップ4名、ダスタークロス5名、掃除機5名、事務所清掃①②それぞれ1名、喫茶サービス5名、商品化9名、運搬・陳列0名、文字入力1名、文書作成3名となっている。

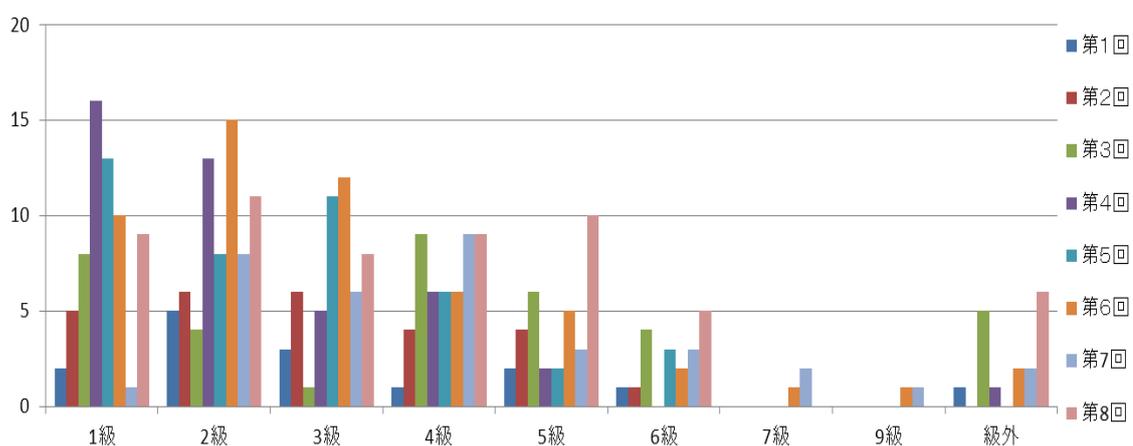
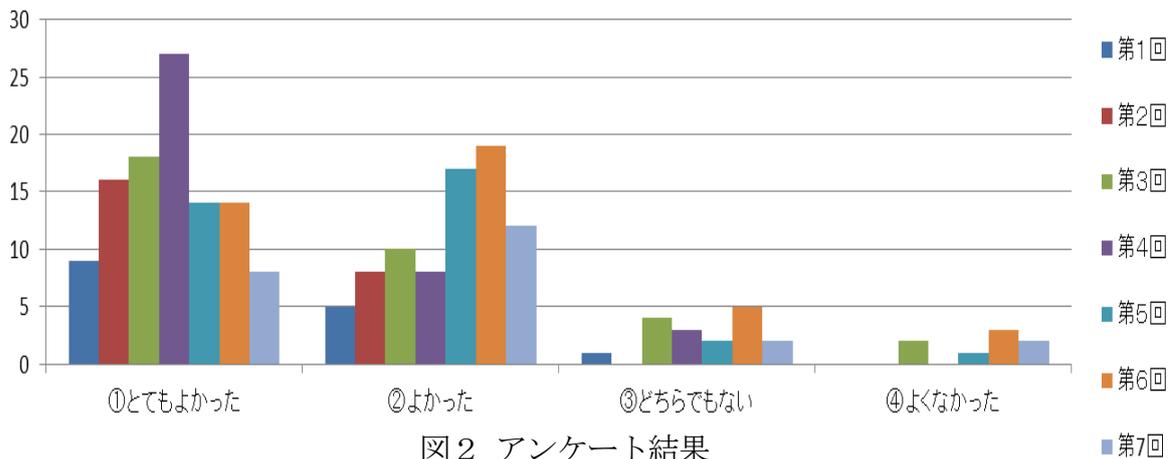


図1 認定級取得者数

(イ) 参加者の感想

図2は、生徒を対象に行った、第7回までの技能検定後に行ったアンケートの集計結果状況である。検定を受けてどう思ったかについて、「とてもよかった」「よかった」「どちらでもない」「よくなかった」の四つの選択肢で尋ねた。この結果は、①の「とてもよかった」を選んだ生徒が、回を増すごとに増えていた

が、第5回目以降は減少している。理由としては、「自分の力が出せた」や「いい級が取れてよかった」、「一生懸命頑張ったから」など、努力してよかったという達成感を感じている生徒が増えてはいるが、やはり、検定結果に伴って、数値は変化していることを改めて感じている。思っていた級が取れなかった生徒は、記述したコメントにおいて、「まだまだ力不足だった」や「自分の今の力が分かった」、「次は頑張りたい」など、評価表を見て、自分の課題を受け止め、前向きに考える生徒が増えており、「将来に役立つ」や「目標を持って取り組む姿勢が身に付いた」「声をはっきり出したり、挨拶の習慣が付いた」などという、検定そのものではなく、そこから得られた自分の力に気付き始めている生徒が回を重ねるごとに増えてきている。別の質問で、「検定をしてどうだったか」においても、「検定だけ頑張るのではなく、普段の生活の中で、技能検定で学んだことを生かしていくことが大切だと思う」や「これからの学校生活に生かしていきたい」、「もっと学んで社会に生かそうと思った」などと、卒業後の働く生活を意識して取り組む生徒が、アンケートの文面から読み取れた。



エ まとめと今後の課題

このように、技能検定に向けてキャリアトレーニングに取り組み、評価表を通して活動を振り返ることで、身に付いた力や自分の課題を知ることができ、自己理解が深まりつつある。技能や働く意識の向上が、卒業後の進路として、高齢者施設での清掃業務やスーパーでの販売実務、飲食店での接客業務に携わる生徒が出てきている。今後も、より多くの生徒が希望する進路先で働けるように、身に付けた力が生かせるような職場開拓が必要である。次に、キャリアトレーニングにおける自分の目標が明確になることで、活動への意欲が高まり、活動の準備や片付けを自分たちで主体的に行うようになってきている。準備や片付けなどを行うことは、自分たちの活動をより充実させ、商品や道具の扱い方や管理方法への理解を深めることにつながっている。挨拶やテキストに書かれた接客方法などは、日頃の学校生活や現場実習先などでも生かされ、適切なコミュニケーションを取る力となっている。今後更に、身だしなみや言葉遣いに対する意識を、日頃の生活に結び付け習慣化でき

るように、学年・クラス単位で継続した指導・支援を工夫し取り組んでいく必要がある。また、普通科の生徒の1級取得などにより、産業科の生徒の中での、普通科の生徒に対する意識も変わってきている。普通科の生徒も、就職を目指して、より高い技能を身に付け、希望する進路先につながるような指導支援を考えていきたいと思う。生徒の希望を優先に取り組んでいるが、生徒の特性や進路に合った部門や種目についても話し合い、情報提供や班編成を工夫していく必要がある。

4 おわりに

高等部ではキャリア教育の視点から、普通科・産業科のそれぞれで取組を進め、普通科では生活単元学習における清掃活動に目を向けて取り組んだ。1年生では、キャリアガイド教室から学んだ内容を日頃の清掃活動に生かせるように取り組んだ。2年生では、継続して学んできた内容を清掃活動に生かす取り組みについて考えた。3年生は卒業後の生活につなげるための取組を行った。産業科では清掃や接客、販売実務、情報サービスなど、それぞれの作業種目の開発において成果を上げてきている。また、高等部ではキャリア教育の視点から清掃活動に着目して取り組む中で、拭いたり掃いたりして汚れやごみを取り除く掃除から、きれいにしてその場を使う人へのおもてなしの心を促していくことの必要性を再確認することができた。

一方で、キャリア教育を進めていく中で、学校行事や業務内容などの負担が増してきており、今まで取り組んできた内容の精選や削減も行わなければならない。生徒が卒業後の目標（夢・希望・進路）を持ち、今の自分（自己理解）を見つめ、協力者や工夫することを考え、短期目標を持って具体的な実践を進めていくことが大切になる。今、学習していることが、将来どのように役立つのかといった意識が、日頃の学習や生活に対する姿勢や意欲の改善につながり、そのことが自分のキャリア発達につながっていく。今後も生徒一人一人の課題を共有できる日々の授業についてキャリア教育の視点で振り返る事例研究を進めていきたい。

【参考文献・図書】

「実践キャリア教育の教科書 特別支援教育をキャリア発達の視点で捉え直す」
菊地一文 編著 2013 （学研教育出版）

訪問教育 絵本を取り入れた授業実践

1 はじめに

本校の訪問教育の担当者が1回2時間の授業で必ず絵本を取り入れている。絵本は、言葉の習得など国語の教科的な要素を含み、行事の追体験や具体物を用いての再現遊びというように、学習を展開できる教材である。「障害の重い子どもの授業づくりPart7」では、絵本を教材として使用する意義・効用・効果が16項目にわたって取り上げていて、その中には「生活を豊かにするキャリア教育の視点」もあった。絵本をより効果的に授業に取り入れるためにどうすれば良いか検討することにした。

2 目的

- 絵本を取り入れた授業を研究する。
- 授業研究を通して、訪問教育担当者間における訪問教育児童生徒の共通理解を図る。

3 方法

- (1) 資料等から絵本の教材としての効果などについて話し合う。
- (2) 絵本を取り入れた授業を実践する。
- (3) 絵本の選択理由や教材の工夫、子供の反応を記入した絵本リストを作成し、授業のビデオを視聴して、授業研究を行う。

4 実践内容

(1) 平成29年度の取組

	小学部	中学部	高等部
児童生徒数	1名	1名	2名
構成位置	始めの会の後	始めの会→マッサージ→本時の主活動後	始めの会→マッサージ→本時の主活動後
手順表名称	こくご	おはなし	おはなし
冊数	2冊	3～4冊	1冊

ア 小学部

6～9月に取り上げた絵本のビデオを撮影した。そこから、絵本のページをめくる時間が長いことが分かった。また、絵本の提示が児童の手が届く位置では児童が絵本に手を伸ばすことが多く集中していないことも分かった。登場人物のペープサートを作って提示することもあったが、絵本から学習を展開することはほとんどなかった。児童の反応としては、絵本に手を伸ばす、オノマトペなどを聞いて笑う、森の奥をイメージした暗い色のページでは顔をしかめる、「かえる」「とまと」「よいしょ」「わっしょい」などの言葉を模倣することがあった。また、読む前に絵本を2冊提示して、児童が手に取った本を読んでいるが、気に入った話を毎回選ぶことが多かった。季節や行事を考えて絵本を選んでしたが、絵本リストを作ることになって、目標や発語を促すような言葉を考えたり子供の反応をイメージしたり

して選ぶようになった。

イ 中学部

体調が不安定で入院して欠席することが多かったので、9月に使用予定の絵本2冊をビデオで撮った。絵本は生徒の視線に合わせて提示した。この生徒は自発的な動きはあまりなく、眠っていることも多いので担当者が読む順番は決めていた。生徒の反応としては、オノマトペなどを聞いて笑顔になり、「モチモチの木」の1場面を影絵にするとじっと見るがあった。体調によっては手や体に触れるとえづくこともあるので、活動が限られ、絵本を読む時間が多くなった。季節や行事に関する題材とオノマトペなど言葉のリズムを楽しむ題材を選択した。

ウ 高等部

1か月前半と後半に分けて絵本を替え、5～7月の絵本のビデオを一人の生徒のみ撮影した。視線が上を向いているので、自分から絵本に視線を向けるように生徒の顔の前に提示した。主活動後の休憩を兼ねているので学習の展開はなかったが、感想画を描いたり、どんぐりの絵本を読んでから文化祭に販売するリースにどんぐりを貼り付けたりした。生徒の反応は、話を聞いたり絵本に触れたりして笑い、担任と一緒に数を数え、絵本の感想や好きな登場人物を尋ねると声を出して応じた。絵本の選択は高等部という年齢を考えて、幼児向けの絵本は避けた。季節や行事に関する題材や登場人物やストーリーの面白さをポイントに難しめの題材を選択した。

エ 全体

同じ絵本を読んで子供の反応を話し合うことの提案があり、12月「かさじぞう」瀬田貞二（福音館書店）、1月「てぶくろ」内田莉沙子訳（福音館書店）を読んだ。「かさじぞう」では、地蔵が荷物を運ぶ掛け声「よういさ よういさ よういさな」を聞いて、どの子供も笑顔になった。高等部の生徒は笠や地蔵の数を担当者と一緒に大きな声で数えた。「てぶくろ」では、小学部児童は始めに読む絵本に選ぶことが多かった。高等部生徒は担当者が動物によって声色を変えると喜び、増えていく動物の数を声に出して数えた。絵本を読んだときの子供の様子を情報交換することが増えた。

(2) 平成30年度の取組

	小学部	中学部	
児童生徒数	1名	2名	
構成位置	始めの会→マッサージ→本時の主活動→休憩後	始めの会の後	始めの会→マッサージ→本時の主活動後
手順表名称	えほん	こくご	おはなし
冊数	2～3冊	2冊	4冊

ア 小学部

11月の「ぴんぼーん」（アリス館）をビデオに撮影した。児童の顔は左を向いているが、絵本は正面に提示していた。視覚はあまり見えていないようだが、児童の視線に合わせて提示して、絵本が顔のそばにあることやページのめくる動きを感じ

ることが必要ではないかと話した。今回はドアチャイムの音をステップバイステップのスイッチに録音して、「ここはだれのおうちかな」の言葉で促して児童がスイッチを押すと絵本を読むやり取りをした。また、絵本に登場する動物のぬいぐるみを使ってごっこ遊びをすると、意欲的にスイッチを押した。読み聞かせでは意識を向けて聞いている。点字絵本では点字を右手で繰り返し触ることもあった。絵本選びでは、繰り返しの言葉の面白さや期待感、ごっこ遊びへの発展を考えた。

イ 中学部

生徒2名とも11月の絵本をビデオ撮影した。生徒の実態が異なるので、同じ月でも違う絵本を読んでいる。昨年度小学部だった生徒は絵本から学習を展開することが多く、このときは、造花の紅葉の葉やどんぐりで再現遊びをして、カードやペーパーサートは同じ登場人物を選んだ。いずれも意欲的に活動した。絵本は学習の展開をイメージして選択した。もう一人の生徒は、体調を考慮して見たり聞いたりする活動を多く取り入れ、絵本を4冊読んでいる。オノマトペを聞いて笑顔になることがあり、このときは「まほうつかい」（偕成社）に出てくる様々な魔法の呪文を手作りの魔法の杖を担当と一緒に持って言うのにこにこすることがあった。絵本は季節に合わせたものや言葉のリズムを楽しめるものを選択した。

5 成果と課題

絵本の選択は各担当者に任せたので、絵本リストによっていろいろな絵本を知る機会になった。担当者自身の趣味の絵柄や物語から、児童生徒の実態に応じたものを選ぶことがあるが、絵本リストには子供の反応も記入したので、それを参考にすることで選択の幅が広がった。

絵本のリストから選択理由は「季節を感じるから」が多かった。訪問教育の児童生徒は戸外に出る機会があまりなく、快適な温度の室内で過ごしている。外の様子を見ることのできる窓から遠い位置のベッドが横になっている。自分の体感で季節を感じることはできないが、絵本を読むことで季節を感じる機会になった。

各部のビデオを視聴し授業研究をしてからは、担当の子供の反応をイメージしたり学習の展開を考えたりして選ぶことが増えた。

絵本を読むことで、児童生徒と教師との一体感・共感関係・信頼関係を形成することになる。それは「えほんのせかい こどものせかい」で、「読み聞かせという行為それ自体の中に、（略）子どもはおとなの自分に対する愛情を感じとっていい」ということでも分かる。また、「考えることよりも感じることがじゅうぶんになさなければならないと思う」ことも書いてあり、絵本から多くのことを感じてほしいと思った。

また、タブレット端末等で活用することのできるDAISY図書を図書情報課で取得していただいたので、今後はその活用も取り入れていきたい。

【参考文献】

「障害の重い子どもの授業づくりPart 7」 飯野順子 授業づくり研究会 I & M (ジアース教育研究社) 平成28年

「えほんのせかい こどものせかい」 松岡享子 (文春文庫) 平成29年